
 書 評

Guide to Observing the Moon
 (British Astronomical Association)

月という天体は、我々に最も身近な天体であり、昔から人々の日常生活に様々な影響を与えてきた天体である。従って、古代から月の運動については、かなり精密に知られていた。近年になり、望遠鏡が作られ、さらに人類が月に降り立つようになると、月についての知識は飛躍的に増大した。それに反比例して、月に対する神秘的な感情というものは薄れてきてしまったが、それでも初めて望遠鏡を通してなまの月を眺めた人は、きっとその神秘的姿に打たれることであろう。この本は、そうしたアマチュアの観測者が、さらに少し本格的な観測をしようとする時に、そのガイドとなる本である。

この本は、British Astronomical Association (イギリスで1890年に設立されたアマチュアの組織)の Lunar Section が中心となって編集された。その特徴は、月観測の基本的な事柄が初心者向けにわかりやすくまとめられているということであろう。本文は100ページ余りであるが、全体が12の章に分かれており、各章はそれぞれの専門家によって書かれている。おもな内容をまとめてみると、イントロダクション(1章)、望遠鏡と基本的な観測(2, 3章)、座標と運動(4, 5章)、スケッチ及び写真(6, 7章)、月食の撮影(8章)、過渡的現象の観測(9章)、星食の観測(10章)、月の地形学(11章)、測光・測色的特徴(12章)となる。これらの項目をみればわかるように、月観測の主要な話題はすべて含まれており、それに加えて観測する上で知っておいた方がよい月運動の初歩について簡単にまとめられている。なお、12章は内容がやや専門的である。巻末には、月に関するデータ、月ロケットの一覧表、月面図が載せてある。

全体として、本文は比較的簡潔にまとめられているのだが、図や写真についてはもう少し配慮がほしかった。特に Appendix III の月面図であるが、複数のページに分かれているためあまりみやすいものではない。実際に観測するときには最も必要な図であるだけに、1枚のわかりやすい図にまとめてあった方が便利であろう。また、文字だけの説明でなく写真をもう少し増やした方がわかりやすいのではないかと思われる。色についての説明には、カラーの写真がほしいところである。

月は、身近にありすぎるため、どうしても惑星や星雲・銀河の方へ関心が向かい、かえってじゃまものにされる傾向にある。月が出ていて他の天体が観測しづらい

夜など、逆に月を丁寧に観測してみてもどうだろう。小口径の望遠鏡でもその表面のようすはよくわかるし、手作りの望遠鏡でも非常によく観測できる。そして、ただ眺めていること以上のことがしたくなったら、この本を参考にするのがよいと思う。(吉川 真)

近世日本天文学史

渡辺敏夫 著

(恒星社厚生閣 発行、)

1986年6月, 上巻 450頁, 8,500円

1987年1月, 下巻 586頁, 12,000円)

著者が序文で述べているように日本の天文学史に関する著述は「明治前日本天文学史」(日本学士院編, 1960)を除いては余り見当たらない。従来の簡史あるいは啓蒙書にあきたりない読者にとって、この著者によるこの著述は待望久しい書と言えよう。近世と冠してある書名どおり、本書は江戸時代の天文学史で明治以後は扱っていない。主題は西洋天文学の東漸に始まり太陽暦の採用で終わる。本書(上巻)の中枢を占める貞享、宝暦、寛政、天保の4回の改暦の経緯の大綱や、そこに登場する主要な人物の歴史的な評価はすでにほぼ定まっており、本書でもそれらが特に目新しい視点からとらえられている訳ではない。本書の特色は何んと言っても豊富な史料にある。同じ著者の「日本の暦」(雄山閣, 1976)と同様に「今後の研究者の参考に確実な史料を供するため」(序文より)の文献の引用は毎頁のように見られる。著者が半世紀にわたって収集・整理してきた天文方や土御門関係を主とする、従来活字にならなかった引用史料は研究者にとって大変有難いものである。本書はまさにこの著者ならではの労作である。上巻(通史)では4度の改暦を主軸にして、ほかには仏教者や国学者の天文学、地動説などの章があるが、測量術と航海法の章は下巻の方がふさわしい。下巻(観測技術史)では天文台、測器、時計、望遠鏡、経度測定、彗星など13の章がそれぞれ独立にまとめられている。上下巻ともに人物の業績を核に時代順につらねて歴史の変遷を辿っている。このようなまとめ方からも推量されるように、本書は著者の史観に立っての総合的に編さんされた歴史書というより、資料集あるいは辞書的な性格の濃い本になっている。研究者のために確実な史料を提供するという著者の意図はそれなりに生かされていると言えよう。例えば江戸時代の天文暦学者について言えば、同じ出版社の天文学講座に収められている「人名辞典」よりずっと多くの頁がさかれており、下巻巻末の人名索引を利用すれば十分辞書として役立つ。

いままで述べてきたように本書の特徴は豊富な引用史料にある。それらは当然ながら漢文、または漢文調の文

章がほとんどである。ご存じのように横書きの漢文というものは返り点もたどりにくく誠に読みづらいものである。横書きには慣れている理科系の読者でもかなり辟易するのではないだろうか？ また文科系、特に歴史関係の人は私達が想像する以上に横書きを嫌う傾向がある。本書の読者層が奈辺にあるかわからないが、数式が現われるのは僅か数頁である点を考えれば本書は縦組みにする方が利用し易かったのではなかろうか。もっともこれは著者というより出版社の問題であろうけれど。

最後に、渋川春海が師事した岡野井玄貞が朝鮮の容羅山に学んだとあるのは朝鮮からの客の羅山（朴安期という）であって容という姓は朝鮮には無いと言う。本書のみでなく従来書にいつも誤り伝えられているので小事ながら敢えて一言する。
(内田正男)

お知らせ

1987年 天文天体物理若手 夏の学校

日 時：7月23日(木)～7月27日(月)
場 所：長野県北佐久郡立科町
会場・宿舎：樽ヶ沢山荘

全体企画：スペース アストロノミー (仮題)
費 用：1泊 約 5000 円
連絡先：〒606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部宇宙物理学教室
天文天体物理若手夏の学校事務局
校 長 洞口俊博
事務局長 太田耕司
(Tel. 075-751-2111 内線 3890)

山田科学振興財団からの研究援助, 申込みについて

昭和 63 年度の研究援助として、本会宛に次のような連絡がありましたのでお知らせ致します。

1. 援助の対象：自然科学の基礎的分野における重要なかつ独創的な研究に従事する個人又はグループ。
2. 推薦者：学(協)会代表者
3. 援助額：1件1千万円以内の援助を10件以内
4. 推薦件数：1推薦者ごとに4件以内
5. 日程：推薦要領送付：62年4月
推薦書用紙送付：62年9月
推薦受付期間：用紙到着直後～63年3月末
選考結果通知：63年7月末頃
援助金贈呈：選考結果の通知後分割贈呈
用紙が到着しましたら、本紙10月号或は11月号でお知らせします。

1987年2月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	0,	0	11	0,	0	21	0,	0
2	—,	—	12	0,	0	22	—,	—
3	0,	0	13	—,	—	23	0,	0
4	0,	0	14	0,	0	24	0,	0
5	0,	0	15	1,	2	25	1,	2
6	0,	0	16	0,	0	26	2,	3
7	0,	0	17	—,	—	27	1,	2
8	0,	0	18	—,	—	28	1,	6
9	0,	0	19	0,	0			
10	1,	2	20	0,	0			

(相対数月平均値：2.3)

◇ 5月の天文暦 ◇

日 時	記 事
4 11	月 最遠
6 10	立 夏 (太陽黄経 45°)
6 11	上 弦
7 19	水星 外合
13 22	望
16 8	月 最近
20 13	下 弦
21 23	小 満 (太陽黄経 60°)
28 0	朔

◇ 5月の日月惑星運行図 ◇

